

稲畑 〈いなはた〉 人形（氷上町）

今から約百五十年ばかり昔、丹波〈たんば〉地方から京都見学にでかける人が多数いました。
丹波稲畑の少年、赤井若太郎も父〈ちち〉のゆるしをもらって、京都見物にでかけることになりました。

伏見〈ふしみ〉の稲荷〈いなり〉神社の参詣〈さんけい〉をすませて、朝の伏見の町をあるきながら、とある人形やの店先にやってきました。

そこでたたずんでしまいました。

「おい、若太郎どうしたんや。」

「早〈はよ〉うこいよ。」

友達〈ともだち〉にせきたてられながら、美しい伏見人形にみいつています。

すっかり伏見人形にみせられてしまったようです。

人形をみつめながら、郷里〈きょうり〉稲畑の赤井ねんどのことを考えています。

・・・稲畑の赤井ねんど、約〈やく〉四百年昔、備前〈びぜん〉の宗太郎〈そうたろう〉がこの地にきて茶つぼをつくりました。
“宗太郎焼〈やき〉”とよばれてさかんだった話・・・

この人形を赤井ねんどで作ったら、赤井ねんどで練〈ねり〉人形をつくろう。
それが神様〈かみさま〉のおつげかのような気がしてもう矢〈や〉もたてもたまらなくなりました。

彼は郷里〈きょうり〉にかえると、父のゆるしをこいました。
まもなく、伏見から人形勝といわれる職人〈しょくにん〉をよびよせて、人形づくりにとりかかりました。
彼も寝食〈しんしょく〉を忘れてけんめいに努力〈どりょく〉しました。

数十種の原型〈げんけい〉がつくられ、人形が見事にやきあげられました。今もすぐれた若太郎の逸品〈いっぴん〉がのこっています。
この赤井練人形は“稲畑人形”とよばれ、名声〈めいせい〉をはくし、業者〈ぎょうしゃ〉もふえてさかんになりました。
教育人形、郷土芸術〈げいじゆつ〉として人々からよろこばれ、農閑〈のうかん〉きの副業〈ふくぎょう〉として郷土をうるおしました。

おいしいことに明治以後はだんだんとおとろえて、今ではわずかに赤井家だけで、その伝統〈でんとう〉が守り続けられています。
なお、赤井若太郎は大正十三年、九十三才で没〈ぼつ〉しました。

